

# 民研部会から

## 美術部会

### 子どもの作品・表現をまん中にして……

石井 緑

美術部会は、思春期・プレ思春期の美術教育というテーマで、小学校の高学年から中学生の美術教育について研究しています。児童生徒の作品を持ち寄り、実践者はテーマ設定の理由、実践の過程、

授業中の子どもの様子を発表します。どの先生方もとても楽しそうに子どもの姿を語ります。聞いている参加者も子どもの制作の様子や先生とのやり取りを想像し、その作品を読み取ります。実践者の

気がつかなかった良さを発見し、授業の反省点も見つかります。毎回毎回、参加者同志の忌憚のない意見交換によって、課題が深まります。

今、どこの地域でも、現職教員の参加が少なくなっています。美術部会でも、退職間近の教員や退



職者の参加と、現職教員の参加がほぼ同じ人数比となっている現状です。その中で退職教員がやらなければならないことを考えさせられます。

先日の研究会でこんなことがありました。私は二年前に早期退職しましたが、現役時の作品を見せながら、若い先生たちに話をしていた時でした。ひとりの先生が「自画像に心の中にあるものを描かせたいと思うのですが、この時にはどのような指導があったのですか」と聞いてきたのです。彼の選んだ三枚の絵は、

2011年の作品だったことに気がつきました。3月に東日本大震災、その後の福島第一原発事故、その年は生徒に「命の尊さ」を話すことが何より大事な年でした。私の学校は、三年生は広島に修学旅行に行くこともあり、命の尊さと戦争と原子力は、逼迫した問題として一年間繰り返し生徒に話し、みんなで考え続け

た年でした。自画像の表情に、いつもの年には見られないような厳しさと何かを考えるような気持ちが表示されているとしたら、教員みんなで命を見つめる授業を行ってきたからだと思います。私は、その若い先生の絵を読み取る力に驚きました。同時に私がその時忘れていた大事なものを呼び覚まされました。若い先生方に私たちが年配の教員が伝えなくてはいけないことは、授業で何を伝えたのかということだと思います。



昨年度は、新学習指導要領検討の重要課題もありました。これからの厳しい世の中を見据えると、次世代の先生方に託さなくてはいけないことがたくさんあります。新しい時代を任せる若い先生方と共に、みんなが心置きなく語り合え、部員相互が学び合える研究の場として、これからも続けていきたいと思っています。

(共同研究者)